

忠敬たちが訪れた測量先では、藩主などから国産品や日用品の贈り物があった。

測量隊は、品物によっては使者などに頼んで売却し、その代金を留守宅に送金した。

贈り物は、「測量日記」に記録されているだけでも百十回ある。藩主からが大部分で、特に四国、九州の大名からが多かった。

かつお節、刻みたばこ、織物、ろうそく、紙などの国産品が多く、ときには金貨、銀貨、青銅貨など貨幣もあった。

近畿地区では、文化二年（一八〇

潮音 風声

お夫 達
ま 間
く 久
さ 佐

五)の「四月十五日 伊勢内宮御師より菓子箱」に始まり、「十二月二十八日、大阪惣年寄などより歳暮祝儀」まで八件が記されている。初期のころは、受け取ってよいか判断がつかなかったためか、「江戸へ帰り、うかがいをたててから受け取る」という趣旨の記述がある。

忠敬は江戸へ帰ってから、贈り物をしてくれた藩の江戸藩邸に弟子を連れて出向き、測量への協力と、贈り物に対し、お礼のあいさつを忘れなかった。

江戸での日記によると、第七次測量時の返礼に二十五人の藩主へ、第

藩主からの贈り物

八次では三十六人の藩主にあいさつしている。

このほか、測量に出る前、年始、暑中、寒中には若年寄ら幕府の測量事業にかかわる人々、親族や友人にあいさつに出向き、絹織物や郷里の特産品であるマス、カモなどを贈っている。忠敬の律義な性格がうかがえる。

こうしていいいな記述のおかげで、私たちは当時の社会風習を推察することができる。また、封建社会の中で生きた人々の気苦労もしのぶことができるのである。

(元伊能忠敬記念館長)